

リンゼイのキリスト教倫理学

岩 村 太 郎

序

イギリスにおける民主主義の擁護者、あるいはヨーロッパにおける民主主義の擁護者としてアレキサンダー・ダンロップ・リンゼイの名は、我が国においてもようやく知られるようになった。リンゼイの主要著作は明らかに『民主主義の本質』であり、そこでリンゼイはイギリスにおける民主主義思想とピュウリタニズムとの関係を詳らかに比較研究しているのである。

しかしながら『民主主義の本質』は、我が国においては、特にその初期には社会科学系の研究者たちによって主に読まれていたために、リンゼイ研究の中心がやや社会科学的側面に傾きがちであったことは、むしろ当然のことと言えよう。けれどもまさに今現在においてリンゼイを一側面からのみ読み込もうとする研究者は皆無なはずである。リンゼイ研究の水準は、ここ数年で一気に跳ね上がったと考えてよいであろう。

そこで本稿の目的は、プロテスタント信仰の上に堅く立つリンゼイの倫理観の源泉、すなわちリンゼイのキリスト教倫理学について、述べてみたいと思う。リンゼイ自身は余り「キリスト教倫理学」という言葉を直接的には使ってはいないにもかかわらず、あえてここではリンゼイのキリスト教倫理学にこだわって論を進めてみたいと思う。日本におけるリンゼイ研究者の研究成果に対し、それらを謙虚に学びつつ小論をまとめてみたい。

1. 倫理学とキリスト教の間

倫理とはギリシア語のエートス、すなわち「習慣・習俗・住居」などかなり広い意味をもつこのエートスに語源をもつものであることが一般に知られている。しかしながらどれにも共通していることは、人間が他者と共同で生活をする時に、またその過程において、偶然にではなく必然的に獲得してきた一定の規範、つまり共通のルールのこと、これが本来の倫理の意味であり、そのことを研究する学問が倫理学であるということである。自己の価値観とは全く異なる他者のもつ価値観、あるいは相互に異なる世界観がぶつかる時に起こった現象、これを倫理と呼んでいるわけである。倫理とは、共同で住まわざるをえない人間社会における、一種の結果なのであろう。

当然のことながら、共同生活の中においては個人の自由が制限される。しかし本来人間は自由を求める存在であるがゆえに、そこには制限された自由しか存在しえない、しかしやはりこの制限つきの自由には満足できない。個と他者との一種の緊張関係が、永遠に続いているのである。しかもそのような共同社会の中にしか、人間は生きられない。無人島での一人暮らしとは、残念ながら絵本の中の話でしかないことは明らかである。

突き詰めて言えば、倫理学とは「人間はこの世界の中で、どこまで自由にしていよいか」ということを追求する学問である。DNA 遺伝子を人間の手で操作してよいか、本当によいか、という問いに答えるべき学問が倫理学なのである。遺伝子操作一つをとってみても、全く自由に操ってよいと考える人と、自然法あるいは神をもちだして、自然や神の摂理には逆ってはならないと真剣に主張する人とがいるのである。あるいは全く別の角度から、そもそも価値基準は時代や風土によって異なるのだから、個々に判断すべきであって、単一の基準を求めることなど意味がないとの主張も存在する。いわゆる近代主義と言われる考え方は、この主張に最も近いのである。

ここまでの議論を整理すると、それは次のようなものになる。そしてこの思いきった二つの主張の対立とは、倫理学にとっての生命線なのである。一つは倫理的絶対主義の主張であり、もう一つは倫理的相対主義の主張である。絶対主義の場合、多くの場合にその絶対的基準とは自然法であったり神、神の意志であったりすることがほとんどである。相対主義とは、紀元前にまでさかの

ほる古代ギリシアの哲学者プロタゴラスの言葉「人間は万物の尺度である」、この立場を拡大化したものである。価値の基準を相手側にではなく、こちら側の人間自身の中に求めるため、客観的な価値認識が否定されてくる結果となった。近代の主観哲学の根源が、この古代ギリシア哲学の中にすでにその萌芽が見られることは面白い。

倫理的相対主義とは、言い換えると、絶対的なストッパーをもたない立場と言えよう。不思議なことに倫理的相対主義者は、相手との議論に絶対に負けない。特に相手が倫理的絶対主義者の場合など、この傾向は顕著である。それはまるで、政治評論家が政治家に少なくとも議論のレベルでは絶対に負けないのに似ている。負けない理由は明らかである。そもそも評論家はその典型的なように、相対主義者は客観的な価値基準を自らの内にもたないし、そもそももつことを否定している。つまりその都度その都度、相手を攻撃する立場を変えながら攻撃し続けることが可能なのである。しかも今主張したこの立場さえも、次の瞬間には相対的なものとなる、つまり相手にも自分にも絶対に負けないのが倫理的相対主義者の正体なのである。

しかしながら本当に倫理的相対主義の主張は正しいのであろうか。何でも相対的なものだから、何でも自由であるという無責任な主張は本当なのであろうか。もしこれが本当ならば、人間は悩む必要などなくなるであろう。刹那的快樂とは言い過ぎかもしれないが、その時々衝動に従って生きていけばよいこととなってしまう、そこにはストッパーが機能しなくはなりはしないだろうか。もちろんこれはやや極端な言い方であり、倫理的相対主義が全てこうだと決めつけている訳では決していないが、少なくともこのような危険性を含んでいると指摘したいのである。相対主義の主張の中にも、その都度考え抜かれた真剣な主張があることを十分に承知した上でも、後述する通り筆者のような典型的な倫理的絶対主義者の目には、やはり以上のように映るのである。

倫理学とキリスト教の間、あるいは倫理学とキリスト教を結ぶもの。そしてその結果としてもたらされるキリスト教倫理学の成立。この関係を明らかにしつつ、さらにリンゼイの思想の中で、キリスト教倫理学がどのように位置づけられるのかについて検討することが本稿の第一の課題であった。結論から先に述べるならば、リンゼイは明らかに倫理的相対主義者ではなく、倫理的絶対主

義者である。そしてその究極的な基準を、キリスト教の、しかもプロテスタンティズムに求めるという、一種のヨーロッパの古典的思想家に連なると言えよう。かのカントもそうであったように、倫理学のその根底に宗教的信念が横たわっているのである。宗教的信念をもたない倫理学者たちからは、しばしばこの点が非難的になる。しかしながらどんなに非難されようとも、リンゼイにとっての信念は微動だにしていない。もっともリンゼイ自身は決して自らを「倫理的絶対主義者」と称して、この立場に固執していた訳ではないが、それほどまでにリンゼイにとって倫理とキリスト教は不可分なものであったのである。

ストッパーとしての倫理学、ストッパーとしてのキリスト教、そして最終的にはストッパーとしてのキリスト教倫理学の成立について論じてみたい。倫理学とキリスト教の間とは、ついには一本の糸で結ばれ、そこに価値の絶対的基準を置くという、倫理学の一分野が開拓されてくる。一見古典的すぎて、余りにも平凡な分野であるとの批判を受けつつも、今まさにこの視点こそ、すなわち古くて新しいキリスト教倫理学の再構築こそが急がれていると筆者は考えている。プレーン(plain)な人間のプレーンな価値を普通に追求していたリンゼイ。社会科学の立場から離れて、ここではプレーンにキリスト教倫理学の在り方を、リンゼイ思想に照らして考えてみたい。

2. カント倫理学から学ぶもの

リンゼイが近代民主主義の研究者であることが、余りにも有名なために、逆にそれ以外の研究軌跡がしばしば見落とされることがある。リンゼイが名を成す以前から、また名を成した後も続けていたカント哲学研究について、ここで一言ふれておきたい。

その大切な一面、隠された大切な一面こそリンゼイのカント研究であったと言わざるをえない。あのリンゼイがカントも研究していたこと。それはリンゼイ自身の守備範囲を大変広くすることになったのである。そのほんの一例をあげるならば、リンゼイがスコットランドのグラスゴーに赴いた時、それはわずかに二年間のことではあったけれども、そこで道徳哲学

の講座を担当していた。この道徳哲学という講座は、とても伝統と権威のある講座であり、リンゼイ以前にフランシス・ハチソンやアダム・スミスが担当していたものであった。リンゼイの地道なカント研究なしには、とても考えられないことであろう。¹⁾

リンゼイが道徳哲学の講座を担当していたことの重要性は、今日の日本の状況からはその意義を正確に理解することは難しいかもしれない。当時のイギリス、と言っても彼らはイングランド、スコットランドその他と厳密に区別しているのではあるが、イギリスやヨーロッパの大学で道徳哲学を講じるためには、狭い倫理学だけでなく、今で言う広い学際的知識をもつ、第一級の学者であることが要求されていたのである。リンゼイがそれに値する学者であることは、自他共に認める公然とした事実であったことが分かる。さらにカントとのつながりを見ておきたい。

リンゼイの著作で、カントの名がその表題に直接冠せられているもので、そして現在も入手可能な文献としては以下の二点がある。出版年順に、『イマヌエル・カントの哲学』(*The Philosophy of Immanuel Kant*, 1913)と『カント』(*Kant*, 1934)。そして小論ではあるが、「カントの因果関係の説明」(“Kant’s Account of Causation”, 1909)があり、一応現在においては以上の三点が入手できる基本的資料である。リンゼイのカントとの出会いは、以上の三点を除いては考えられない。初めの二点は、カント哲学をやや概説的に紹介したものとの印象は免れえないけれども、カント哲学を英語圏に非常に分かりやすく紹介したものとして古典的な価値を有するものであると思う。そして特に『カント』の一部は、エディンバラ大学での講義ノートとして準備されたものであることも分かり、歴史的意味と歴史的価値のあるものである。平易さを心がけ書かれている理由は、この辺にあるのかもしれない。²⁾

リンゼイのカント研究が概ねどのようなものであったかは、以上の通りである。しかしながら二人に共通して流れる血について、次に見てみたい。この点

も余り一般には知られていない事実なのである。

一七二四年に東プロシアで生まれたカント、一八七九年にスコットランドで生まれたリンゼイ。カントに遅れること一五〇余年を経てリンゼイは生まれ、そしてここで再び二人は歴史に残る思想家として出会うのである。前述した通り、カントの祖父はスコットランドからの移住民であり、現在でもスコットランド人はカントの中にスコットランドの血が流れていることに強い誇りをもっている。その上にヒュームがカントに与えた影響の大きさを知る者ならば、なおのことスコットランド人としての誇りを強くしているのである。³⁾

血による心情的な結びつきの他にも、リンゼイとカントにはいくつかの共通点があるが、一方、明らかに相違している点も見逃せない。特にカントは神の存在証明について全エネルギーを使っていたが、リンゼイの場合にはそのような努力はしていない。神の存在は、自明なこととされていたのである。理論理性で一旦は否定されてしまった神の存在を、カントは必死の思いで実践理性によって救い出した。この間のカントの胸の中の葛藤は、それは想像を絶するものであったにちがいない。リンゼイはカントに比べれば、素直に神を前提とし、福音信仰の上に素直に立っていた。リンゼイの学風が、やはり社会科学的であったこと、この点が二人の決定的なちがいであったのである。

リンゼイがカント倫理学から学び、さらにリンゼイ自身が加えた新たな視点、カント倫理学をいかに発展的に継承して行ったかについて、その結論を明らかにしておきたい。

カント思想を吸収しながら、リンゼイがさらに加えた新たな視点が何かはもうここで明らかであろう。それは時代への参加意識である。危機に瀕してこそ人は初めて批判をしなければならない。批判する（クリネイン）という言葉の本来のギリシア語の意味は、分離分断することであり、つまり区別識別する能力なのであった。正と不正を判断すること、今ここにある歴史的状況の中で何をなし何を発言するべきかを判断すること、それが

リンゼイにとってはナチズムへの批判という形になったのである。危機(crisis)と批判(criticism)とは、どちらもギリシア語のクリネインに語源をもつものであり、危機に瀕した時に正しい批判が求められたということである。リンゼイはまさに、デモクラシー勢力を守らなければならない危機的状況の中で、ナチズム批判を展開したのである。⁴⁾

道徳、倫理の本質が単なる「お題目」ではなく、まさに社会の中で起こるさまざまな矛盾に対する実践的な手段とし位置づけられるのであるならば、リンゼイは見事に道徳、倫理の本当の意味を見抜いていたことになる。歴史的、政治的事象には余り関心を払わなかったカントに比べ、リンゼイは社会参加の意欲とその実践という、さらなる一步を踏み出したのであった。受容し、批判的に継承し、そしてさらに発展させるという、本当にうらやましい関係がリンゼイとカントにはあった。この関係こそ、万人が学ばなければならないことではないだろうか。

リンゼイがカント倫理学から学んだことの意義は、思想という枠組みを大きく超えたものとして今日まで受け継がれていると思う。次にわれわれもリンゼイの思想を発展させるべきである、という新たな課題もここに提出されているのである。

3. 究極的価値としての自由の問題

倫理学およびキリスト教倫理学を確立する時に、必ず通らなければならない自由の問題をここでとりあげてみたい。自由の問題は単なる通過点ではなく、むしろ倫理学にとって究極的価値をもつものであると筆者は信じている。

リンゼイの道徳思想を成立させたその根本動機が、キリスト教とカント倫理学であったことは、以上で明らかであろう。しかしながらキリスト教とカント倫理学を、リンゼイは社会という実践の場へと応用したのである。すなわち近代民主主義社会の中で、守るべきものと捨てるべきものをリンゼイは正しく識別しようとしたのであった。「分かる」ことは「分ける」ことから始まるように、近代民主主義の中での本当の自由を分かろうとし

た人こそリンゼイであると言えよう。「真理はあなたたちを自由にする」という聖書の言葉は、まさにリンゼイへの贈る言葉のようでもある。⁵⁾

ヨーロッパ封建社会の中では抑圧され続けてきた自由は、やがて近代社会、直接的には資本主義経済が支配する社会の中で飛躍的に認知されるに至った。この自由は、大きく二つに分けられて考えられるのが一般的である。一つは、市民的自由(civic liberty)であり、もう一つは、政治的自由(political liberty)である。市民的自由とは、ヨーロッパ近代においては、契約の自由、企業を起こす自由、財産所有の自由、身体の自由、移動の自由、思想の自由など、それは主に個人的なものを指していた。一方の政治的自由とは、参政権などのような直接的政治活動に関係することを指している。

リンゼイが個人的自由を論じる時、この点はやはりカントとは鋭く対立して、あくまでも社会内存在としての個にのみ視線が向けられている。他者を前提とした共同社会の中にしか個は存在しえない、というのが大前提とされている。『民主主義の本質』の「第二版への序文」に書かれた五つの要素、民主主義の本質となる五つの基本理念とは、次のようなものである。1) 討論が民主主義の基本。2) 各人が意見の相違を表明できること。3) 反対党が必要。4) 寛容の原理。5) 民主的社会。現在においては当然とされていることではあるが、一九三五年のヨーロッパ社会においては、決して当然のことがらではなかったことは、歴史が証明しているところである。リンゼイの批判の矛先がファシズムに対して、そしてそれは主にドイツのナチズムに向けられていることは明らかであった。血を流して、長い闘争の末に勝ちとったイギリス・デモクラシーを、そう簡単に引き下がりヒトラーの足で踏みじられる訳には行かなかったのである。さすがのリンゼイもこの点では寛容になりえなかった。

リンゼイの立場を明確にするために、ここで再びカントのそれと比較してみたい。カントにとっての自由、とりわけ倫理的自由とは、人間の意志が感性的欲望に拘束されるのではなく、それはあくまでも理性的な道徳法則の命令によるものであった。カントはこれを自律的意志として、他律的意志と鋭く区別したのである。そしてこの自律的意志こそが、自由なる倫理的行為の基本とされているのである。カントのみならず、例えばティリッヒなども、自律と他律の

区別を明確にしている。さらに、いわゆる実存主義者たちは「人間は自由であるように、世界に投げ出された存在である」と定義している。リンゼイの立場がカントとも実存主義者たちとも、全く異なっていることは以上明らかであろう。

そもそもリンゼイには、自由と表裏一体をなす責任と義務の意識が強くあった。「真理はあなたたちを自由にする」と言った時に、その言葉が発せられる一歩手前に、責任と義務の意識が働いているのである。「市民的義務の意識」、これこそがリンゼイをリンゼイたらしめた不可欠の要因であると思われる。

リンゼイにとっての究極的価値としての自由の問題は、単なる個人的自由とはちがう、さらに深い意味をもつものであることが以上明らかにされてきたと思う。思索するだけでなく、積極的に行動もしたこと。神なし倫理学が主流になりつつある現在、個と社会と倫理とキリスト教と、これらを体系的に把握しようとしたリンゼイ、われわれはやはりリンゼイから本当の自由の意味を学ぶべきであろう。

4. キリスト教倫理学を成立させるもの

「もし終末の日が存在しないとすれば、すべては許されるであろう」、一般には「もし神が存在しないとすれば」の書き出して始まる有名な言葉であるが、倫理学はしばしばユダヤ・キリスト教の基本構造である、終末論と関係づけて論じられている。厳密に言うならば、ブルトマン、ティリッヒらに代表されるドイツ神学者、及びドイツ神学に強い影響を受けた思想家らの間では、現在なすべき規範倫理の要請根拠を、終末論的視点に求めるのが普通である。

大前提としてユダヤ・キリスト教は、時間の流れ、すなわち歴史の流れを直線としてとらえた。始まりと終わり、天地創造と終末、この絶対的に揺らぐことのない二点間の中に人間は生きる存在であると解釈した。人間の生きる有限的時間とは、はるかかなたに存在していた起点と、はるかかなたに存在するであろう終点との中間時に位置することとなる。すでに(already)といまだ(yet)の間を生きるのが人間である。ここから現在なすべきことの意味を、遠い終末から見るために、終末が決定する現在の行動意味、すなわち倫理学が成立するのであった。「歴史の意味は常にあなたの現在にあるのであって、あなたはそれ

を見物人のように見ることはできない」というブルトマンの確信に満ちた言葉。さらに「終末論的な瞬間である可能性が凡ゆる瞬間の中にねむっている」というブルトマンの歴史的緊張感、これらはユダヤ・キリスト教のもつ終末思想抜きには、とても考えられないものである。つまり、いわゆるドイツ神学とされているものは、時間性の神学であり、そこから導き出されるキリスト教倫理学は、時間性の倫理学に属するものとなるのである。

今世紀にその名を残した神学者たち、バルト、ブルトマン、ブルナー、そしてティリッヒらは、明らかに終末論的視点を重視しており、さらにこの意味ではほとんどシュヴァイツァーも同じである。終末論的視点を欠いたキリスト教倫理学など、とても考えもつかないものであると彼らは共通に認識していたはずである。「神の国」および「神の支配」を成立させるべき終末思想とは、これほどまでに根強い神学的根拠をもつものであった。

その他に、キリスト教倫理学を成立させるための根拠となりうるものとしては、例えばマルチン・ブーバーの主張する人格主義であるとか、マザー・テレサが黙して示した愛の実践であるとか、さらに社会的に抑圧された側から徹底的に見るべきであるという社会派の考え方など、成立根拠は決して一つにしぼれるものではないであろう。それぞれが、それぞれの視点をもちつつ、キリスト教倫理学という実践と深く関わっている学問を成立させていると考えてよいであろう。

これまでに論じてきたものとリンゼイの思想は、特にキリスト教倫理学という分野にのみ限定して言えば、あまり直接馴染むものではない。カントの影響は前述した通りではあるが、リンゼイはあまり、あるいはほとんどドイツ神学者たちの間で常識となっていた終末思想などには影響を受けなかったのである。少なくとも書き残されたものとしては、その影響の痕跡は確認できない。では一体リンゼイにはキリスト教倫理学という観点が、全く欠落していたのであろうか、あるいはリンゼイなりの視点を別にもっていたのであろうか、この点について次に論じてみたい。そしてここに新たな地平が開かれることを期待してみたい。

5. 近代民主主義とキリスト教倫理学

一人の神学者としてではなく、あくまでも社会科学的な見地からのキリスト教倫理学がリンゼイにおいて成立するとするならば、それはどのようなものであろうか。そして何よりもリンゼイがモデル、理想的モデルととらえていた社会形態を、われわれは一体どこに求めたらよいのであろうか。古代ギリシアに求める者もいれば、中世ヨーロッパの神聖政治に求める者もいる、アナクロニズムと言われようとも、理想的モデルを人はしばしば遠い過去の中に見出すものである。

そういうわけですから、わたくしは、一七世紀に初めて考え出された、近代民主主義の始源に遡って考えてみたいと思うのであります。当時においては、ひとびとの多くは自治的な集会において素朴な民主的統合のもたらす素晴らしい満足を生き生きと経験していたのでありまして、近代民主主義の観念もこれらのひとびとによってはじめて考え出されたのであります。それゆえ、かれらは、国家もまた、これを模範として組織されねばならない、と要求したのであります。⁶⁾

この引用で明らかな通り、リンゼイはクロムウエルの率いる精鋭な軍隊組織の中に、近代民主主義の始まりを見つけている。イギリスのピューリタニズムに基づいた強い信仰に支えられたクロムウエルの作った集団、この中で行われた自由な政治討議をこそリンゼイは理想的社会ととらえていたのである。独立派の首領クロムウエルとは、リンゼイにとっては、まさに英雄的な存在であったと言える。クロムウエルとは、自らの行ったさまざまな残忍行為でも名高く、その評価もさまざまであることは事実ではあるが、やはりカリスマ的力をもった英雄であったことは確かである。

ピューリタン信仰に支えられた集団、そしてその中で自由な討議、まさにこの点がリンゼイの視点、および価値観の原点である。この原理に基づいてリンゼイの思想は全て成り立っている、と言っても決して過言ではない。すなわち、リンゼイのキリスト教倫理学が成立するとするならば、やはりこの点に戻らなければ意味はないであろう。プラトンの理想国家を学び、カント倫理学を

吸収しその紹介に努め、ベルクソン哲学その他さまざまな影響を受けながら、リンゼイが到達した理想的モデルとは、十七世紀初めのピューリタニズムであった。討論の自由があり、意見の相違が表明でき、反対党が存在し、けれどもそこには寛容の原理が働いている、そのような民主的社会を、リンゼイはクロムウェルの率いる軍隊組織の中に見つけたのである。

リンゼイのキリスト教倫理学を考察するにあたって、まず言及しなければならないことは、リンゼイが近代民主主義の成立に際し、その背景にも根底にもピューリタニズムがあったことに、あくまでもこだわり続けたことである。この基礎の上に近代民主主義も、そしてそこで実現されたルール、すなわちキリスト教倫理学も成立したととらえたのである。それゆえにこの原理原則を押し広げれば、ナチス・ドイツに対する抵抗原理にすらなると考えるのであった。近代民主主義とキリスト教倫理学とは、以上述べた通り、リンゼイにとっては不可分に結びついていていたと考えてよいであろう。

結語

終末思想と倫理学を関係づけて論じる、いわゆるドイツ的神学とは、かなりちがうリンゼイの方法論、それは神学と社会科学の研究方法のちがいにとどまらず、根本的な相違であると言わざるをえない。あるいは見方を変えると、そもそもリンゼイにとってキリスト教倫理学は、自らの学問の目的ではない、と言えるかもしれない。キリスト教倫理とは、リンゼイが追い求めた十七世紀イギリスにおけるピューリタンの集団の中で、必然的に機能した強い原理。極端に言えば、それ自体が目的ではない、一種の手段的原理、これこそがリンゼイにとってのキリスト教倫理であったのではないだろうか。それゆえにリンゼイのキリスト教倫理学を独立させ、民主主義の本質についての考察などと切り離して論じることは不可能なことであった。

本稿における結語として、リンゼイのキリスト教倫理学とは、理想的な民主主義社会を作る時の手段的原理になりうるものである、ということ、まずこの点を述べておきたい。さらにその原型をリンゼイが、十七世紀初めのクロムウェルにまで戻って探し求めていたこと、この点も同時に明らかにされた。

註

- 1) 岩村太郎「リンゼイとカント——実践理性の優位をめぐって——」『イギリス・デモクラシーの擁護者 A.D.リンゼイ——その人と思想』永岡薫編著 聖学院大学出版会 1998年、111頁。
- 2) 前掲書、111頁。
- 3) 前掲書、123頁。
- 4) 前掲書、126—127頁。
- 5) 岩村太郎「リンゼイの道德思想」『研究紀要』第31号 恵泉女学園短期大学英文学科 1998年、84頁。
- 6) A.D. Lindsay, *The Essentials of Democracy*, London, University Press, 1929. 永岡薫訳 [増補]『民主主義の本質』未來社 1992年、24頁。